



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター  
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

**研究課題(和文):** 社会調査の比較歴史社会学の構築

**研究課題(英文):** Organizing the Historical Comparative Sociology of Social Research

**申請者名・所属先:** 佐藤健二・人文社会系研究科(期間延長により、2022年4月、祐成保志・人文社会系研究科に交代)

**海外招聘者名:** 李永晶(上海・華東師範大学副教授)

## 1. 研究の目的

本研究課題は、「社会調査」という社会学に固有の実践に光をあてつつ「比較歴史社会学」という新たな研究領域を開拓しようとするものである。「社会調査史」は、単なる技術の応用の歴史ではなく、社会認識を生産する様式の発展史であり、いわば社会学そのものを対象とした歴史社会学に他ならない。そしてこの課題は、人文社会学の再生のプロジェクトでもある。それは、制度論や政治哲学からの社会分析にかたよった政治学とも、市場の分析や経済メカニズムの抽象性の水準で社会を把握する経済学とも異なる、文化に根差した固有の質をもつ社会認識の解釈や分析をひらく。いいかえれば、現代社会を生きる人びとの経験のなかの〈社会的なるもの〉あるいは〈公共的なるもの〉の現状と可能性、すなわちその捉え方、感じられ方、表象のされ方に迫る方法の開発を目指すものである。

## 2. 研究開始当初の背景

1980年代以降の東アジアにおける社会学の復権と社会調査の必要性の進化によって、ようやくグローバルな比較のための現実的な条件が整いつつあることが、本研究を着想した一つの背景である。ただそれ以上に重要と思われるのは、社会調査という実践が、単なる手法である以上に、「社会」をめぐる想像力の産物であり、インターネットなどのデジタル空間がグローバルにひらかれた現代において、「社会」もまた大きく変容していることである。「社会」と名指すべき人びとの絆やシステムがどこか衰弱し、「国家」「企業」「市場」として制度化された集合性の諸枠組みのなかで、創出しにくく、壊されやすく、維持しにくい存在であることが明らかになりつつある。本研究課題は、東アジア社会が共通して直面するこうした現状を、人文社会系諸学の学問内在的に打開するという問題意識に支えられている。

## 3. 研究の方法

社会調査の比較歴史社会学的方法的な規準に関する集中的な討議を経て、戦略的に重要な日中両国の社会調査を取り上げ、方法の分類、調査のリスト化、問題意識や対象設定、さらには分析内容の検討、そこにおける〈社会的なるもの〉の把握の成否、その研究の理論史・方法史上の位置づけを考察する。その際、申請者(佐藤)が科研費プロジェクトなどを通じて組織してきた社会調査史の研究者集団との連携を図り、より長期にわたる共同研究のための具体的な展望を得る。

## 4. 研究成果

本研究課題に関連して、第70回 HMC オープンセミナー(2022年6月9日、オンライン)、第89回 HMC オー



オンライン)を開催した。

第 70 回では、「社会調査史のなかの「質的データ分析の方法論的諸問題」—見田宗介の問いかけ」と題し、1960 年代半ばに見田宗介によってなされた社会調査の方法論に関する問題提起の現代的意義について、佐藤健二教授(東京大学未来ビジョン研究センター)が報告を行った。主要な論点は、質的アプローチと量的アプローチの対立、実証と方法論との関係、比較社会学と歴史社会学の構想、フィールドとしての個人の発見、テクノロジーの方法論的な再検討である。ディスカッサントの祐成保志はグローバルな社会調査史にみられる同時代性、瀧川裕貴准教授(東京大学大学院人文社会系研究科)は社会調査データの分析における人間と機械の協働という観点からコメントした。李永晶副教授も現代中国社会での「データ」「情報」の使われ方と受容について発言し、議論に加わった。

第 89 回では、「社会をめぐる想像力と社会調査——比較歴史社会学の視座」と題し、デジタル化によって扱われるデータが飛躍的に増大する一方で、国家、企業、市場に還元されない「社会」を発見・創出・維持する基盤となっているのか、検討した。報告者の富江直子教授(茨城大学人文学部)は、日本の 1920~30 年代の社会事業調査に着目し、調査者、被調査者、社会の三者関係のなかで、調査がいかなる意味で社会事業の実践でありえたのかを考察した。同じく李副教授は、パンデミックのもとでのデジタル化の現状をもとに、現代中国における「社会」の捉え方、データと権力などの視点から、社会調査の現在を論じた。後半では、ディスカッサントの富永京子准教授(立命館大学産業社会学部)、佐藤健二教授をまじえて討議を行った。

2023 年 7 月、コロナ禍の影響で延期されていた李副教授の来日だが、ようやく実現した。12 月 16 日には、佐藤教授が主宰する「歴史社会学フォーラム」の研究会(東京大学法文 1 号館)にて、「流行語と世相——中国社会を社会学することの可能性について」と題して、李副教授がこの間の研究成果を報告した。流行語を素材に、柳田國男の「世相史」、見田宗介の「社会史」、鶴見俊輔の「精神史」の方法を用いて 1980 年代以降の中国社会を社会学的に分析するという李副教授の構想について、参加した研究者との間で活発な議論が交わされた。

## 5. 主な発表論文等

### 〔図書〕

(著書) 李永晶, 《大欢喜: 论语章句评唱》, 漓江出版社, 2022 年 8 月。

(著書) 李永晶, 《变异: 日本二千年》, 广西师范大学出版社, 2021 年 8 月。

(同書 繁体字中国語版 香港三聯書店, 2023 年 9 月。)

(共著) 李永晶, 《人文社科名著导读》, 王峰编, 华东师范大学出版社, 2023 年 11 月。

(共著) 赤川学・祐成保志編, 『社会の解読力<歴史編>』, 新曜社, 2022 年 3 月。

(共著) 祐成保志・武田俊輔編, 『コミュニティの社会学』, 有斐閣, 2023 年 12 月。

### 〔雑誌論文〕

(論文) 李永晶, 《五四运动在日本: 另一种“当事者”的体验、认知》, 载《历史学人》, 2021 年 10 月。

(論文) 佐藤健二, 「見田宗介=真木悠介の本願: 人間解放の比較=歴史社会学のために」『思想』1192 号, 2023 年 8 月。

(論文) 佐藤健二, 「渋沢敬三における「学問」と「実業」」『歴史と民俗』39 号, 2023 年 3 月。

### 〔学会発表〕

(講演) 李永晶, “华夏三千年精神史: 思考普遍秩序的可能”, 淼庐论坛, 2023 年 8 月 26 日上午

(講演) 李永晶, “克己复礼: 一个基于孔子思想的方案”, 淼庐论坛, 2023 年 8 月 26 日下午



〔その他〕

（中国語版序言）李永晶，《从下级武士到帝国政治家：伊藤博文和他的“明治幕府”》，《伊藤博文：近代日本の奠基人》，伊藤之雄著，社会科学文献出版社，2021年9月。

6. 招聘フェロー（海外招聘者）からのコメント

三つほどの研究課題を持って、2023年の7月に東京に到着しました。コロナ禍の影響で三年以上に長引いた研究機会ですが、今振り返ってみますと、まったく予想外の成果が得られたと思うようになりました。コロナ禍が世界中の人々に多大な被害と苦痛をもたらしていたことや感染防止対策がもたらした縫いなどの光景を目の当たりにしまして、日々と言えるほど「真の文明とは何ぞや」を考えさせられていました。また私個人にとりましては、日本に来て初めて、「やっとコロナが明けたな」とつくづく実感するようになりました。日本社会に決して不案内と言えない私は、まるで新しくきた旅人のように、何でも目新しく感じました。不思議な体験でした。社会や人間の再発見とはこういうことだろうか。この時期に得られた様々な体験は、これからの研究の中に現れると思いますが、なによりも人間の真の福祉の増進に繋がる知識にしていきたいと思っています。この貴重な研究チャンスを提供してくださったHMCならびに東京大学の先生方に再び深くお礼を申し上げます。